

熊薬同窓会報

第 34 号

平成 12 年 6 月 30 日
発行

熊薬のさらなる発展を期して

同窓会会長・薬学部長
上釜 兼人

昨年 4 月に同窓会会長に就任以来、はや一年が経ちました。平成 11 年度は、熊薬にとりましても激動の一年であり、様々な出来事がありました。そこで、この一年間を振り返りながら、今後の展望を含めて、同窓会並びに熊薬の近況をご報告いたします。

まず初めに、昨年 9 月下旬に襲来し熊薬キャンパスにも多大な被害をもたらした 18 号台風の爪痕は、ほぼ完全に復旧しました。これも会員の皆様の暖かいご支援の賜であり、改めて御礼申し上げます。ただ、記念樹など多数の樹木類を失ったことは、自然災害とは言え大変残念でなりません。今後とも真の完全復旧に向けて、さらなる努力を続ける所存であります。

同窓会にとりまして、特筆すべき朗報がいくつかあります。昨夏、大阪在住の平島最吉様（昭和 12 年卒）から、母校への謝恩をこめて自作の絵画を寄贈いただきました。早速、ご自宅に感謝状をお届けしましたところ、大変喜ばれました。「阿蘇の秋」を描いた 100 号の大作は、薬学部小会議室で輝いていますので、機会ありましたら会員の皆様も是非ご鑑賞ください。次に、熊薬の歴史に残る快挙として、前同窓会会長の國枝武久教授は、「複素五員環化合物を反応素子とする超効率不斉合成法の開発」に関する研究に対して、平成 12 年度日本薬学会賞を受賞され、3 月末に岐阜市で開催された日本薬学会 120 年会におきまして、授賞式と受賞講演が行われました。また、今秋（10 月 3～6 日）熊本市において、医療薬剤学講座の小田切教授のお世話により、「血清アルブミンと 1 酸性糖蛋白質」に関する国際シンポジウムが開催されます。薬学部主催の国際会議として、熊薬の活性化に大いに寄与するものと期待されます。熊薬同窓会は、今般の國枝教授の学術功労並びに小田切教授の学会活動に対しまして、それぞれ褒賞金並びに助成金をお贈りすることにいたしました。

熊薬研究助成支援の会（1-10 千人会）の基金から、平成 12 年度分の基礎研究助成 4 名と海外派遣助成 1 名の受賞者が決まりました。

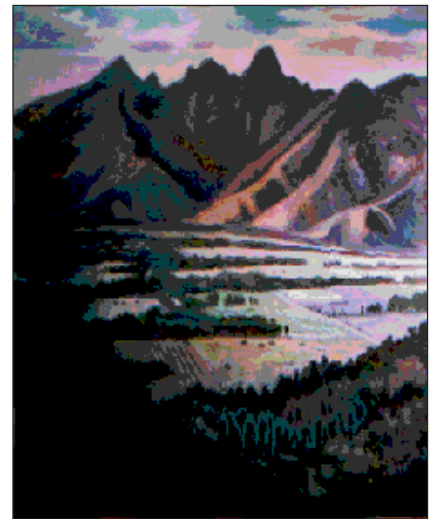
た。受賞の栄誉に輝かれた新進気鋭の 5 名の先生方には、心からお祝い申し上げますとともに、本助成会の趣旨に添って有効に活用していただきたいと思っております。1-10 千人会

人は、若手研究者の研究を奨励し、薬学の向上発展と社会の福祉に寄与することを目的として平成 7 年に発足し、平成 11 年度末時点での総加入者数は 868 名、完納者は 258 名に達しました。本年度も、完納者の皆様に感謝状をお贈りし、本会へのご理解とご支援に対しまして、深甚なる謝意を表した次第であります。

ところで、新聞報道などでご存じのことと思いますが、国立大学は大きな岐路に立たされています。昨秋、独立行政法人化の問題に対して文部省から検討の基本方針が提示され、3 月末には、自民党文教部会から「これからの国立大学の在り方について」の提言が出されました。熊大でも最近ワーキンググループを設置して具体的な検討を開始しましたが、国立大学の設置形態にどのような特例が認められるかが重大な関心事であります。

また、昨年 5 月から大学側のメンバーを加えて再開した薬剤師養成問題懇談会「六者懇」における議論も山場を迎えようとしています。6 年制問題に対する国公立大学薬学部としての当面の意見は、4 + 2 案（学部 4 年 + 大学院修士課程 2 年）が主流を占めますが、実務実習の期間、薬剤師免許の種類、薬剤師国家試験の改善等に関する課題が山積し、当分は目を離せない状況にあります。

このように、改革の嵐が吹き荒れ、国際化や情報化が進む中で、大学も「如何にして個性を輝かせるか」が問われています。熊薬としましては、教職員が一致団結し、次世代を担う研究者や医療人



「南阿蘇秋色」F100号
平島最吉様 昭和12年卒 寄贈

目次

| | | | |
|--------------------------------|--------------|--------------------------------|----|
| 熊薬のさらなる発展を期して | 1 | 訃報 | 14 |
| 熊薬の新カリキュラム | 2 | 平成 12 年度「薬剤師のための医療薬科学研修会」のお知らせ | 14 |
| 大学の教育、研究改革の現状と展望 | 3 | 平成 12 年度熊薬同窓会総会のご案内 | 15 |
| 國枝武久教授 薬化学研究室 平成 12 年度日本薬学会賞受賞 | 4 | 昭和 40 年卒 卒後 35 周年の会開催 | 15 |
| 支部だより | 5 | 庶務報告 | 15 |
| 鹿児島支部 | 宮崎支部 | 学内だより | 15 |
| 福岡支部・蘇陵会 | 岡山支部 | 生化学教室創立 35 周年記念講演会 | 16 |
| 兵庫支部・楠熊会 | 関東支部・東京バツテン会 | 及び記念祝賀会を大盛會裏に終えて | |
| 卒業生だより | 8 | 公開シンポジウム くすり与健康 | 16 |
| 熊薬、昔は今(13) | 9 | 寄付者一覧 | 17 |
| 研究室だより(製剤学研究室) | 11 | 1-10 千人会入会者一覧 | 17 |
| 熊薬研究助成金受領者研究報告書 | 12 | 1-10 千人会寄付者芳名録 | 19 |
| 平成 11 年度卒業(修了)者就職(進学)先一覧 | 13 | 熊薬研究助成支援の会について | 20 |
| 博士号取得者 | 14 | 編集後記 | 20 |
| 慶事 | 14 | 連絡先 | 20 |

の育成を目指して、大学院および学部教育改革など、様々な課題への対応に努めています。組織・運営面では、学校教育法や国立学校設置法の改正に伴い、諸規則の制定・改廃や会議の効率化、各種委員会のスリム化などの作業を進めております。

熊薬で現在最も力を入れている大学院の高度化は、21世紀の医薬品開発の柱となるゲノム創薬を主体にした分子機能薬学専攻の新設を企図して、文部省と鋭意折衝中であります。ゲノム創薬とは、病気の原因となる遺伝子情報の解析に基づいて、癌、エイズ、生活習慣病などに対する画期的な治療薬や予防薬の開発を目指すものです。将来、個人の体質に合わせたオーダーメイド医薬品の開発が可能になるため、特許攻勢が激しさを増していますが、日本も本腰を入れて取り組まないと、国際競争から取り残されることとなります。

一方、学年進行中の臨床薬学専攻では、この3月に第1回目の博士前期課程修了者7名が誕生し、4月から後期課程がスタートしました。本専攻のカリキュラムの特徴は、6ヶ月間の病院および薬局における臨床薬学実習(前期課程)、大学院講義の夜間開講、社会人の受け入れなどが挙げられます。今後、臨床薬学専攻の教

育研究体制を拡充するには、専用研究棟新営の早期実現とともに、大学院修了者の社会への受け入れ(就職)拡大にさらなる努力が必要なことを痛感しております。

学部教育の改革に関しましては、足かけ2年にわたる教務委員会の精力的な活動により、4年一貫教育としての薬学教育の講義・実習カリキュラムを抜本的に見直して、基礎学力の充実に加えて、1年生から現地体験実習等を導入して使命感や倫理観を高めるよう工夫しました。特に、4週間実務実習の必修化(病院実習:2週間、薬局実習:1週間、医薬品情報実習:1週間)に関しましては、熊本県内の医療機関や薬局でご活躍の同窓生諸氏に多大なるご支援とご助力をいただき、深く感謝いたしております。

平成12年度は、20世紀から21世紀に変わる大きな節目の年であります。世紀を越えて、熊薬のさらなる発展を期して、微力を尽くす所存であります。会員の皆様には、今後とも何卒宜しくご支援くださいますようお願いいたしますとともに、益々のご健勝とご発展を祈念いたします。

(平成12年4月25日記)

熊薬の新カリキュラム

薬学部前教務委員長
高濱 和夫

今、「ダイナミックな変革」が求められています。薬学教育についても例外ではありません。新カリキュラム(新カリ)編成に至った理由や必然性は、敢えて申し上げるまでもありませんが、薬学を取り巻く以下のような状況があったためです。1)平成4年度の医療法の改訂に伴う、国家試験の出題基準・内容の変更、2)医薬分業の推進等による薬剤師の職務内容の拡充・深化、3)上記に関連して、薬剤師実務実習の充実、4)分子生物学領域の進展に象徴される基礎医学・薬学の著しい発展、5)新たな感染症や環境問題など薬学が取り組むべき領域の拡大、6)薬学および薬剤師活動と密接不可分の情報科学の進展、7)医療人として倫理観豊かで、国際的視野をもった人物の育成、などです。これらの諸課題に対応するために、平成10年春、國枝学部長(当時)から薬学部カリキュラム改訂のお考えが教務委員会(委員長、宮田教授、当時)に対してなされました。以来、2年にわたる討議を経て、本年度、上釜学部長の下で新カリが発足することになりました。

新カリの編成に当たって、まず、基本方針として、薬学部の教育理念・目標である「薬学は医薬を通じて人類の健康に貢献する総合科学である」との理念のもと、医薬品の創製・生産・管理、環境・保健衛生及び薬剤師の職能等に関わる基礎知識を修得させ、生命科学を基礎とする高度の「薬学的思考力」と倫理感を備えた創造性豊かな人材を育成する」の実現を目指すことになりました。さらに、抜本的な改訂とするために、第一に、教育すべき授業科目(内容)を先ず厳選し、それを各教員が分担する、第二に、必然的に増加する授業コマ数を確保し、各授業の目的を学生に明確に示すために、クォーター制(1年を4つの学期に分割)を採用する、という方針が、教務委員会で、次いで教授会で決定されました。

具体的には、臨床医学基礎から臨床心理学まで薬剤師の職能にかかわる10科目以上の科目、分子生物学や生体機能化学などの先端科目、加えて環境薬学などが新規に導入されました。また、基礎科目の化学、物理化学、生物学や関連科目については、限られた時間枠の中で、授業内容が重複せず有機的な関連を持ち、かつ時代に則した高度な内容まで進めるように、ご担当の先生方により知恵が絞られました。その結果、教養科目を除いた薬学部の新カリ講義科目は以下になりました。

- 1年次:有機化学 ~、物理化学 ~、分析化学 ~、生化学 ~、機能形態学 ~、解剖学概論、薬学概論、医療倫理学、情報リテラシー ~。
- 2年次:有機化学 ~、物理化学 ~、分析化学 ~、生薬学 ~、生化学、免疫学 ~、分子生物学 ~、病態生理学 ~、微生物化学 ~、薬理学 ~、薬剤学、衛生薬学、臨床医学基礎 ~。
- 3年次:有機化学 ~、物理化学、生薬学 ~、放射化学 ~、生体機能化学 ~、微生物化学 ~、薬剤学

~、薬理学、薬物治療学 ~、製剤学 ~、医薬品安全性学、医薬品情報管理学、衛生薬学 ~、環境薬学 ~、臨床心理学、薬学ワークショップ。

4年次:有機化学、製剤学、薬局方概論、漢方概論、医薬統計学、医薬品情報管理学、薬物処方学、臨床薬物動態学、臨床検査学、看護学、臨床経済学、薬事・衛生法規 ~、薬学演習 ~。

実習科目についても、従来の研究室ごとに独立した実習方式を見直し、薬学教育に必要な実習は何かについて、有馬助手会会長を始めとする助手層の先生方を中心としたワーキンググループでご検討いただきました。その結果、化学系実習は基礎と発展(応用)に分けて関係4研究室で共同実施し、生物系実習は遺伝子から丸ごとの動物まで、系統的に配置し、得意な分野を研究室が担当することになりました。また新規に、1年次に早期薬学体験実習を、2年次にコンピュータプログラムを扱う情報科学系実習を、3年次に実務実習のプレ実習としての医療系薬学実習を導入し、他の実習科目もご担当の先生方により全面的に見直し改善がなされました。早期薬学体験実習は、入学後早い時点で、学生が薬学を学ぶ目的意識と意欲をもてるよう、病院・薬局、企業の研究所、保健衛生関係の試験・研究機関、ゴミ処理場などを見学、研修するものです。全国でも早い時期に導入された実務実習は、従来の病院薬局2週間、調剤薬局1週間に薬学部のコンピュータ利用の実務実習1週間を加えた、計4週間の実習が必修として、県内の病院・薬局の薬剤師の先生方のご協力により平成11年度より再スタートしています。これは熊大方式として実り多いものになることを予感させます。

講師の先生方についても医学部、遺伝発生医学研究施設、教育学部、医療技術短期大学の各分野のご専門の先生方を始め、開業医の先生方や行政関係の先生、熊薬ご卒業の企業、病院、薬局でご活躍の先生方にご協力いただけることになりました。

今回の新カリの編成に当って、教務委員会はもちろん情熱と無い知恵を注ぎましたが、教育は、最終的には、学生各人が如何に勉強意欲を高め、それを自ら実行に移せるかにかかっています。その学生が心が発火するか否かは、一方で、教官の熱意と創意・工夫にもかかっているように思います。同窓会会員の皆さま方には、本カリキュラムを含めて熊薬の教育のさらなる発展のために、これからも一層の適切なご助言とご協力をいただきますようお願いいたします。

結びに、趣旨にご賛同いただき非常勤講師を快くお引き受けいただいた先生方、また、お忙しい中、授業内容についての各分野毎のグループ討論を含めて、ご協力いただいた薬学部および附属病院薬剤部の先生方、それに教務企画係の方を始めとする事務職員の方々々に心より御礼申し上げます。